



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	小学生における漢字書字困難のリスク要因に関する研究(論文要旨)
Author(s)	吉田,有里
Citation	
Issue Date	2020-09-22
URL	http://hdl.handle.net/2309/166472
Publisher	
Rights	

氏 名 : 吉田 有里
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 350 号
学位授与年月日 : 令和 2 年 9 月 2 2 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 小学生における漢字書字困難のリスク要因に関する研究
論文審査委員 : (主査) 教授 藤野 博
(副査) 教授 狩野 賢司 教授 北島 善夫
教授 葉石 光一 教授 澤 隆史

学位論文要旨

近年、インクルーシブ教育に関する議論の高まりに伴い、通常の学級に在籍する読み書き困難の児童に対して、通常の学級のなかで実施が可能なアセスメント及びその結果に応じた教育的配慮の検討が急務となっている。特に漢字書字に関しては習得難易度が高く、通常の学級に在籍する児童のなかにも漢字書字困難を覚える児童が存在し、その困難の様相は多様であることが推察される。また、先行研究で報告された漢字書字テストの正答率の変化を考慮すると、正答率が比較的高い低学年で見られる漢字書字困難の様相と、正答率の低下が始まる中・高学年で見られる漢字書字困難の様相は異なることが予想され、困難の背景にあるリスク要因も異なる可能性がある。そこで本論文では、小学校低学年と中・高学年に分けて、漢字書字困難の特徴とリスク要因について検討を行った。

第1章では、通常の学級における漢字書字困難に関する現状を概観したうえで、漢字学習の低成績と漢字基礎スキルとの関連について、学習指導要領および先行研究で明らかとなっている知見を整理した。また漢字学習の低成績と認知処理能力についても同様に、先行研究で明らかとなっている知見を整理した。これに基づき、本論文の目的を論じた。

第2章では、小学校低学年でひらがな音読障害・困難を有する児童における漢字書字困難の特徴を検討し、音読困難が漢字書字困難にどのように影響するのかを明らかにした。その結果、音読障害群及び音読困難群のいずれにおいても、漢字読字・書字テストで平均正答率の有意な低下を認めた。また、漢字読字困難を伴う漢字書字困難群では有意味語課題の、漢字書字困難のみの群では単文課題のオッズ比が有意な値を示した一方で、漢字読字のみ困難群ではオッズ比が有意な値を示す音読課題はなかった。これより、心内辞書へアクセスし意味表象の想起が必要となるひらがな音読の困難が、漢字書字困難の発生に強く関連していることが推察された。

第3章では、小学校低学年における漢字書字困難と漢字基礎スキルとの関係を検討し、漢字基礎スキルの観点から漢字書字困難のリスク要因を明らかにした。その結果、基礎スキルの低成績群では、漢字読字・書字テストで正答率の有意な低下を認め、単語連鎖課題、特殊音節課題、部品検出課題の3種の漢字基礎スキルに低成績のある児童では、漢字読字・書字テストで低成績

になるリスクは2倍以上であった。また、漢字基礎スキルの低成績が重複した場合の正答率低下、特に漢字部品検出課題と他の基礎スキルの低成績が重複した場合の正答率低下は顕著であり、漢字読字・書字の低成績が重篤化するリスクは8倍以上であった。これより、漢字書字困難には3種の漢字基礎スキルの低成績がリスク要因となり、漢字書字困難の重篤化には、部品検出課題と他の課題の重複がリスク要因として大きいことを指摘できた。

第4章では、小学校中・高学年における漢字書字困難と視覚認知能力との関係を検討し、特に多画数漢字については視覚認知能力の関与が大きいことを明らかにした。具体的には、漢字を同定する力、斜め画を認識する力、漢字の構成要素の位置関係を正しく把握する力の弱さが、多画数漢字の書字困難のリスク要因となりうることを指摘できた。また低学年の結果と同様に、中・高学年についてもひらがなの効率的な読みや漢字の部品や部首を検出する力は、漢字書字困難の発生に関わるリスク要因であることが確認された。さらに語彙の弱さも漢字書字困難に関わるリスク要因であることが明らかとなった。一方で、低学年の時期にはリスク要因として認められた特殊音節単語の読み書き、及び言語性ワーキングメモリーの弱さについては、明確な関連が認められなかった。これより、低学年では音韻方略が主であるが、学年が上がるにつれて意味表象を効率的に用いる学習方略へと変化する可能性を指摘した。

以上の検討を踏まえ、第5章の総合考察では、日本語読み書きの認知モデルを用いて、漢字書字困難の発生機序について考察を行った。その結果、小学校低学年時期では、漢字読字困難を伴う漢字書字困難の場合でも、漢字書字のみに困難を示す場合でも、①文字層内の形態分析に関する機能不全、②文字層と音韻層との相互アクセス活性化不全、③文字層と意味層との相互アクセス活性化不全という3つのパターンで漢字書字困難の発生要因を整理することができた。一方、小学校中・高学年時期では、漢字読字困難を伴うか否かで、漢字書字困難の発生機序に差異があった。漢字読字困難を伴う漢字書字困難の場合には①文字層内の形態分析に関する機能不全、②文字層と意味層との相互アクセス活性化不全という2つのパターンで漢字書字困難が発生するが、漢字書字のみに困難を示す場合には、①文字層内の形態分析に関する機能不全のみが主要な発生要因であると整理することができた。